

種いもに関する制度と生産実態

— JAそらち南(北海道) —

研究員 福田彩乃

バレイショ生産に必要な種いもは、原原種、原種(原原種から生産する種いも)、採種(原種から生産する種いも)へと増殖する。原種、採種は種いも農家が生産し、採種が一般に種いも^(注)としてバレイショ農家に供給される。

以下では、種いもの生産・流通に関する制度とJAそらち南(北海道栗山町)を事例に生産実態について紹介する。

1 生産を担う北海道

種いもを介した病虫害のまん延防止のため、種いもを生産地から移動するには、植物防疫法に基づく国の検査に合格する必要がある。具体的には、ジャガイモシストセンチュウ等の害虫とそうか病菌等の細菌について、植付前(使用予定種いもと植付予定ほ場)、植付後(栽培期間中のほ場)、掘取後(生産物)に検査し(第1表)、合格したものに証票が発給される。

種いもは現在、北海道、青森、岩手、福島、群馬、長野、岡山、広島、長崎、熊本の10道

県で生産されている。

種いもほ場の設置面積(原種と採種の合計)は2000年から08年まで横ばいで推移したが、その後減少している(第1図)。17年の設置面積は、北海道(480千ha)、青森(10千ha)、長崎(8千ha)の順に多く、北海道は面積全体の9割以上を占める。

2 生産は労働集約的

北海道で生産される種いもの多くは、道内のバレイショ栽培に用いられる。ただし、一部はホクレン等を経由して道外のJA、種苗会社、ホームセンター等へ出荷される。

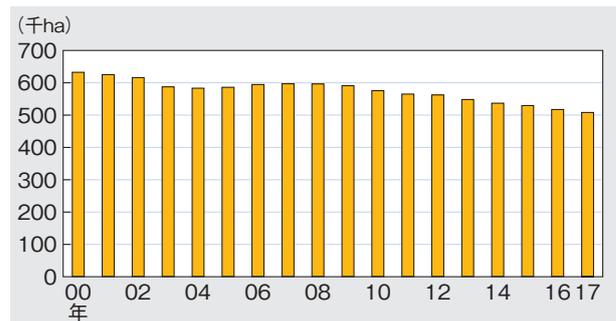
道外向けは18JAが生産し、中でも札幌市東部のJAそらち南は道外出荷量の多くを占める。同JAの道外出荷の歴史は古く、現在は15品種を、鹿児島を中心とする全国の主要産地へ販売している。同JA管内の最近の生産動向を見ると、農家戸数が09年の96戸から18年の74戸へと一貫して減少している。面積は14年から減少し18年は281haである(第2表)。

第1表 種いもの検査内容

検査	検査事項	検査方法	
植付前	使用予定種いも検査	産地及び系統	申請書類等
	植付予定ほ場検査	ジャガイモシストセンチュウが検出されないこと。生産に適した条件にあること。	土壌審査等
植付後	ほ場検査	罹病株がないこと。病虫害が付着していないこと。	ほ場別に、任意に種いもを掘り出し、検査
掘取後	生産物検査	罹病していないこと。くわ等で損傷を受けていないこと。	ほ場別に、任意に抽出した種いもを検査

資料 農林水産省「種馬鈴しょ検査実施要領」

第1図 種いもほ場の設置面積(原種と採種の合計)



資料 農林水産省「種馬鈴しょ検査成績表」

第2表 JAそらち南の種いもの設置面積と1戸あたり面積の推移

(単位 戸、ha)

	戸数	設置面積	1戸あたり設置面積
2009年	96	274	2.9
10	93	270	2.9
11	93	287	3.1
12	91	292	3.2
13	87	292	3.4
14	84	290	3.5
15	81	286	3.5
16	80	278	3.5
17	76	278	3.7
18	74	281	3.8

資料 聞き取りを基に筆者作成
(注) 設置面積は原種と採種の合計。

第2図は道内の種いもとバレイシヨの1haあたりの旬別作業時間を示したものである。種いもは特に3月下旬～4月上旬の植付前準備①と8月下旬～9月上旬の収穫・粗選果②の作業時間が多い。

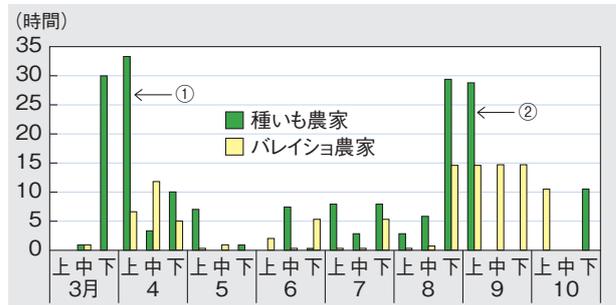
種いも生産では原原種や原種を複数に切り分け、切片を植えつけるのが一般的で、その前準備のため、手作業での切り分けが発生する。また切断刀を介した病害虫の伝染防止のため、切り分けの度に刀の消毒が必要となる。

粗選果は、農家が傷ついた種いも等を手作業で取り除く作業である。早期出荷品種の場合、他の輪作作物と作業時期が重複するため農家の負担が大きいという。

そこでJAそらち南は17年から試験的に、農家から粗選果を受託し、18年には専用機械を導入した。対象品目は、管内で最も設置面積が大きい早期出荷品種のニシユタカ、そしてホッカイコガネ、デジマ、ピルカの4品種とし、管内設置面積の3割をJAがカバーしてい

(注) 植物防疫法等の関連規定では種馬鈴しょと表記されるが、本文では種いもとする。

第2図 北海道における種いも生産とバレイシヨ生産にかかる1haあたり旬別労働時間



資料 北海道農政部(2013)『北海道農業生産技術体系(第4版)』

る。

このように、種いも生産は労働集約的という特徴がある。産地の維持・発展のためには農家のモチベーション向上が重要で、同JAでは30年程前から毎年、鹿児島県内のバレイシヨ農家との情報交換を行っているという。顔の見える関係を構築し、直接、品質についての評価や要望を把握している。

3 安定供給のため、省力化が必要

種いもの生産・流通は植物防疫法等に基づき、安定的に行われている。生産現場では、前準備や栽培期間中の抜き取りを手作業で行い、防除を徹底している。

そうしたなか、規模拡大が進む道内の一部地域では、切断刀の消毒装置を備えたカッティングプランターの導入で植付前作業を省力化する事例が見られる。今後も生産者数が減少することが予想されるなかで、種いもを安定的に供給するためには、機械の導入等で省力化を図ることが重要になると考える。

<参考文献>

- ・カルビーポテト(2017)『ポテカル』No.113
- ・日本特産農作物種苗協会(2010)「特集 ばれいしょ」『特産種苗』No.7

(ふくだ あやの)